

清流の国ぎふ芸術祭

Art Award IN THE CUBE 2017

第1回テーマ

「身体（しんたい）のゆくえ」

展覧会会期

2017年4月15日(土)～6月11日(日)

開催開場

岐阜県美術館

岐阜県岐阜市宇佐4-1-22

JR「西岐阜駅」下車 → 徒歩で15分

JR「岐阜駅」下車 → タクシーまたは岐阜バス

名鉄「岐阜駅」下車 → タクシーまたは岐阜バス

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017とは

2017年4月に展示が始まる同展は、大型のキューブを美術館内に複数設置し、公募によって選ばれた作品をその空間で展示します。第1回の公募テーマは「身体のゆくえ（しんたいのゆくえ）」と設定し、手法・素材・技法を問わず、作品を募集しました。

想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的に、今日の息吹を感じることができる公募展を目指します。

作家

佐藤 雅晴 SATO Masaharu

柴山 豊尚 SHIBAYAMA Toyohisa

谷本 真理 TANIMOTO Mari

中村 潤 NAKAMURA Megu

平野 真美 HIRANO Mami

堀川 すなお HORIKAWA Sunao

松本 和子 MATSUMOTO Kazuko

三枝 愛 MIEDA Ai

三木 陽子 MIKI Yoko

水無瀬 翔 MINASE Sho

耳のないマウス Earless Mouth/ Mouse

宮原 高広 MIYAHARA Takahiro

ミルク倉庫+ココナッツ Miruku Souko + The Coconuts

森 貞人 MORI Sadahito

安野 太郎 YASUNO Taro

主催

清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE実行委員会、岐阜県

企画趣旨

このたび岐阜県では、想像力溢れる新たな才能の発掘と育成を目的に、革新的な企画公募展「清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2017」します。

本展は、「4.8m(幅)×4.8m(奥行)×H3.6m(高さ)」を無限の小宇宙に見立て、この空間の中でなにものにもとらわれず、今回のテーマである「身体のゆくえ」を、自由に表現(制作・展示)していただくとするものです。世代、ジャンルは問いません。作家、鑑賞者ともに、国際的な視野と今日の息吹を感じることができる3年に1度の公募展を目指します。

岐阜県は山紫水明の自然に恵まれ、豊かな森を源とする「清流」は県内をあまねく流れ、様々な恵みをもたらしました。全国の作家から多数ご応募いただき、この岐阜の地で生まれた小さな一滴が、やがて大河となり海へと注ぐように、全国そして世界へ発信し、この「清流の国ぎふ」の新たな魅力と活力の創造に繋げてまいります。

審査員



O JUN

画家／東京藝術大学教授

1956年・東京都生まれ。東京藝術大学で油画技術を学んだのち、スペインに遊学。80年代末に20kgを超える合金の筆を用いたライブパフォーマンスを発表。その後、ドイツ遊学を経て90年代後半からは、鉛筆、クレヨン、水彩など多彩な画材を用いた平板での作品を発表。2000年代以降は再び油彩も手掛け、具体的なモチーフと大きな余白から構成される作品を輩出している。



十一代

大橋長左衛門（年雄）

美術家、陶芸家／ロチェスター工科大学、金沢大学などで客員教授

1958年・石川県生まれ。1984年ボストンユニバースティ大学院修士課程修了。茶道・裏千家や表千家の茶器として、京都の楽焼をルーツに350年の伝統を持つ大橋焼の継承者。2013年第七回 韓国京畿道国際陶芸ビエンナーレ(韓国・利川)招待作家。数々の賞を受賞し、2015年日本現代工芸展内閣総理大臣賞受賞。2016年十一代長左衛門襲名。多くの美術展の審査員を務め、個展・講演・ワークショップなど陶芸家としての活動に留まらず、デザインや空間プロデュースなど現代アートの分野でも活躍している。



高橋 源一郎

小説家、文学者／明治学院大学教授

1951年・広島県生まれ。1981年に『さようなら、ギャングたち』で群像新人賞優秀作を受賞しデビュー。その後、『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞、『日本文学盛衰史』で伊藤整文学賞、『さよならクリストファー・ロビン』で谷崎潤一郎賞を受賞。大学教授、ラジオパーソナリティ、数々の文学賞の選考委員を務めながら、多くの著作を輩出している。



田中 泯

ダンサー

1945年・東京都生まれ。60年代クラシック・バレエ、モダン・ダンスを学んだ後、独自の舞踊を展開する。78年パリでデビューし国際的に活動を開始。85年農村へ移住、本格的に農業を始める。その場を拠点に、国内ではいち早く野外での国際芸術フェスティバルを発展させ26年間継続する。90年フランス政府より芸術文化勲章シュバリエを受章。95年国内外の伝統芸能に焦点を当てた「舞踊資源研究所」を発足。2002年より映画やドラマなど、映像の世界へも活動の域を広げている。踊りの起源を追求し、あらゆる場から生まれる踊りを即興で踊る『場踊り』を展開している。2012年、第6回円空賞受賞。



中原 浩大

彫刻家、美術家／京都市立芸術大学教授

1961年・岡山県生まれ。ドローイング、立体、映像、パフォーマンス、インスタレーションなど多岐にわたる表現方法をもち、彫刻概念の拡張を試みてきた。90年代以降は、現代の社会における芸術活動の“Another Model”（別なかたち・在り方）についての脱領域的アプローチによる模索と試行をかさねている。また、個人での制作研究活動の他、共同研究・プロジェクトなどにも積極的に携わっている。



三輪 眞弘

作曲家／情報科学芸術大学院大学[IAMAS]教授

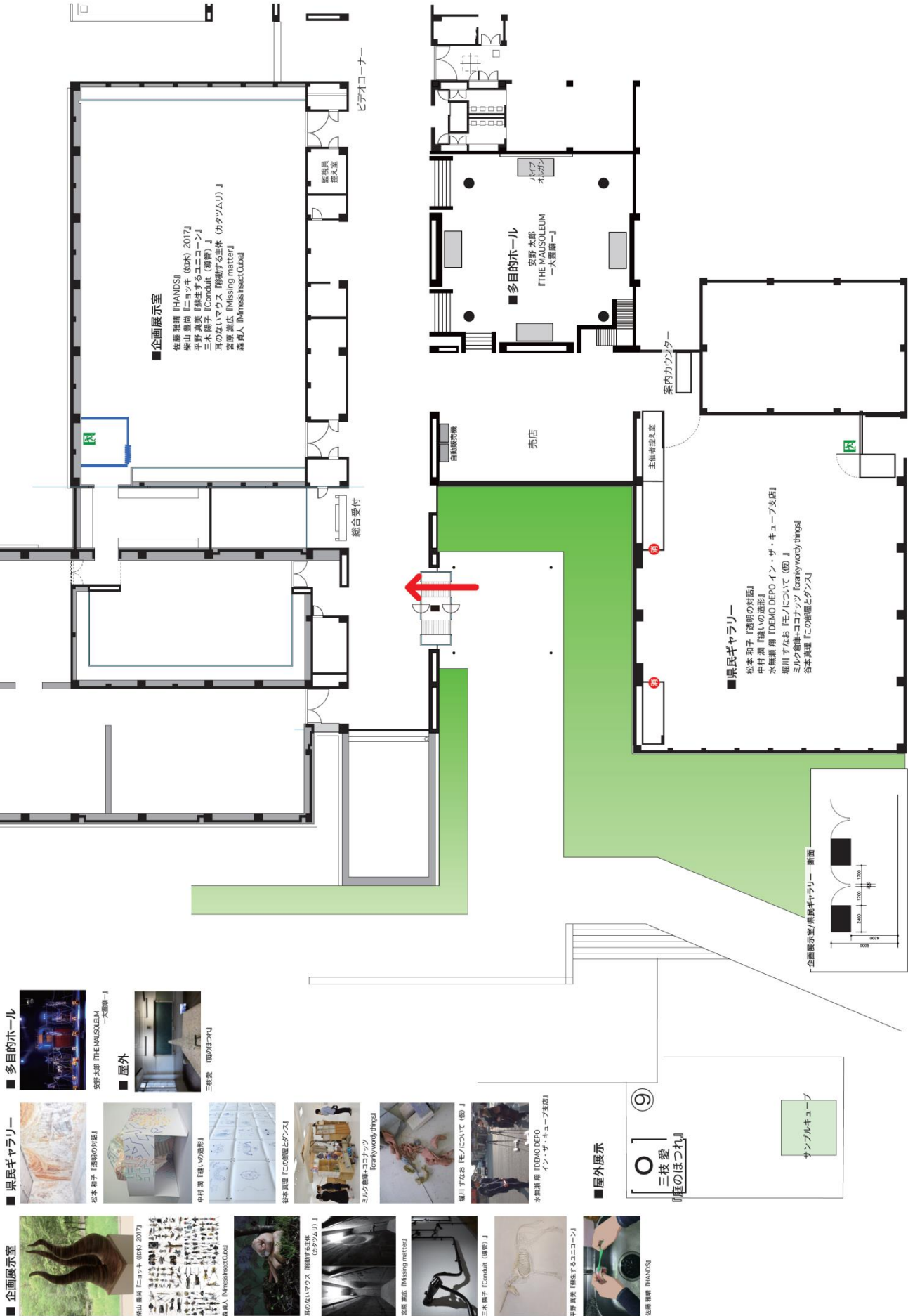
1958年・東京都生まれ。コンピュータを用いたアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる手法で数多くの作品を発表。第10回入野賞1位、第14回レイジ・ルッソ国際音楽コンクール1位、第14回芥川作曲賞、2010年度芸術選奨文部科学大臣賞(芸術振興部門)他受賞歴多数。07年「逆シミュレーション音楽」がアール・エレクトロニカのデジタルミュージック部門にてゴールデン・ニカ賞(グランプリ)を受賞。



篤田 清一

哲学者／京都市立芸術大学学長

1949年・京都府生まれ。1972年に京都大学文学部哲学科卒業後、関西大学教授、大阪大学教授、大阪大学総長などを歴任。大阪大学名誉教授、大谷大学客員教授、せんだいメディアテーク館長。専門分野である哲学・倫理学の視点からアート、ファッション、教育、労働、ケアなど様々な分野において、数多くの評論・執筆活動を行っている。サントリー学芸賞、桑原武夫学芸賞、読売文学賞等を受賞。



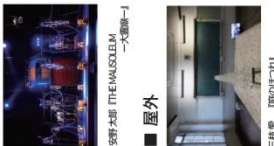
■ 企画展示室



■ 県民ギャラリー



■ 多目的ホール



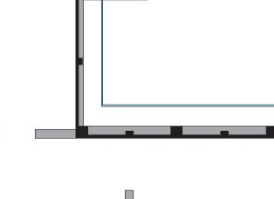
■ 屋外



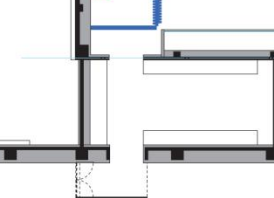
■ 企画展示室



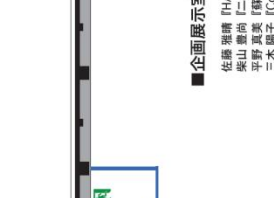
■ 県民ギャラリー



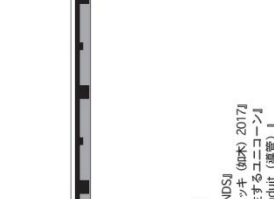
■ 多目的ホール



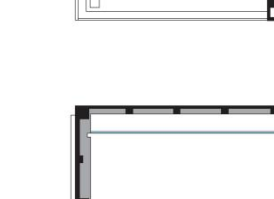
■ 屋外



■ 企画展示室



■ 県民ギャラリー



■ 多目的ホール





HANDS (HANDS)

佐藤 雅晴 (サトウ マサハル)

1973年大分県生まれ。茨城県拠点。

ぼくは、パソコンソフトのペンツールを用いて実写をトレースしたアニメーション作品に取り組んでいます。ぼくにとってトレースとは、対象を「自分の中に取り込む」行為です。それは自分の暮らす土地や目の前の光景への理解を深め、関係を結ぶ行為とも言えます。それらの作品は制作過程においてデジタル機器を活用していますが、実際には膨大な作画の枚数をこなすためには、自らの身体「手」をつかい生み出すことが必要不可欠です。今回、『身体のゆくえ』というテーマから着想した「HANDS」では、猫をなでる手、ハンドルを操る手、入れ歯を洗う手、恋人にふれる手、ページをめくる手、おもちゃで遊ぶ子供の手、筆をはしらせる手、神に祈る手などなど、人々が世界と関係をつくるために用いる様々な「手」の行為を撮影しトレースして、アーカイブされた「手」の映像作品をつくろうと考えています。



ニョッキ (如木) 2017 (Nyokki 2017)

柴山 豊尚 (シバヤマ トヨヒサ)

1955年岐阜県生まれ。岐阜県拠点。

テーマ「身体のゆくえ」について、「身体」を生物・景観、そしてあらゆる物質と捉え、「ゆくえ」を過去・現在・未来の時間と空間、としました。キューブ内の空間に自ら入ることにより、地球・人類の長い歴史の中で、過去から現在を感じたり、未来に向けてのあり方に思いをめぐらしたりする場になればと考えています。この世に存在するすべてのものは、同じ状態に留まることなく常に移り変わっていき、永久不変なものはないと思います。その一瞬を表現できたらと願っています。

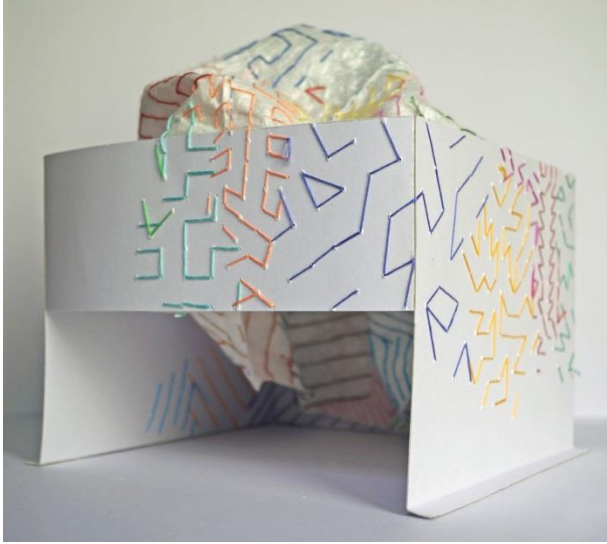


この部屋とダンス (Dance with this room)

谷本 真理 (タニモト マリ)

1986年兵庫県生まれ。東京都拠点。

何か形を作ったり絵を描いたりすることは私の欲求の一つであるが、その行為や出来上がった物は自分の行為や意図の壁に囲まれているようで、もどかしく息苦しいことがある。ところがある時、ふと作りかけていた粘土の塊を床に投げつけてみた。自分がさっきまで作っていた形は一瞬でぐちゃっと潰れてしまったが、今までにない快感であった。それまでの自分を台無しにする行為と、それに伴う新鮮な感覚が私を息苦しい気持ちから解放させた。投げる時、私の身体の動きに影響されて粘土は飛んで行き、壁や物に当たって潰れ、物が壊れたりする。粘土が潰れた感触や、粘土が当たったもの（壁や物など）に、まるで私が触れているような感覚がある。実際には私は触れたわけではないのに、粘土という重たくて可塑性のある素材が媒体となり、その瞬間がとてモリアルに伝わってくる。それは私が把握している範囲よりもずっと遠くへ飛び出していくような感覚である。私の振る舞いひとつひとつが軌跡となりがどんどん広がって空間が出来上がっていく、まるでダンスを踊っているような。この行為は私にとって破壊ではなく、一度作った物や空間を変化させていく新たな造形方法のひとつなのである。



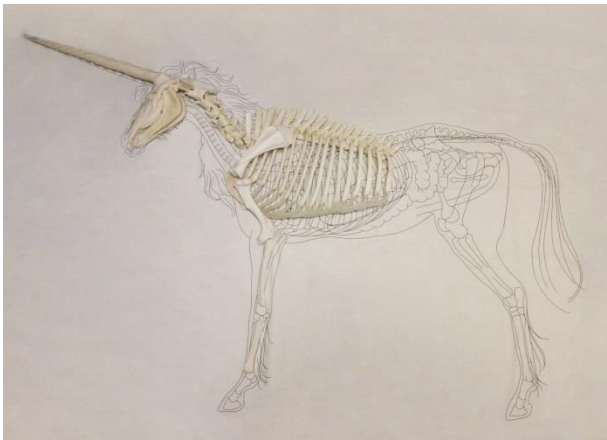
縫いの造形 （The shape of sewing）

中村 潤（ナカムラ メグ）

1985年京都府生まれ。京都府拠点。

祖母が3年前に亡くなった。しかし祖母の残した衣類、祖母が編んだセーター、祖母の書いたメモ、住所録、それらを纏い、身につけるたびに、目にするたびに、私の皮膚や目を通して先に祖母がいる。私の身体の先にある記憶が祖母を感じさせる。

この作品はキューブの中に紙で箱を作る。糸で紙を縫い、箱になり、襷ができ、キューブの壁と縫い合わせる。眼前の紙に触れ、糸を見、縫い目をたどり、触れる。縫い目は「縫い目」そのものだけで存在しているわけではない。「縫い目」を目にした時、長い状態だった糸、進んだ針、縫い目が広がる紙、そこに当たる光、手触り、縫うという行為、その時間、など、このような事々が一緒にあって、見る人の中に入ってくる。眼が慣れ、手で触れ、馴染むうちに、身体の知覚の少し先にある「記憶」や「経験」が顔を出す。個々の視覚、触覚の変化を通して、個々の身体に書き込まれた記憶を掘り起こす。この作品は見えているものを通して、身体の少し先の見えないものを体験するものである。



蘇生するユニコーン （Revive the unicorn）

平野 真美（ヒラノ マミ）

1989年岐阜県生まれ。東京都拠点。

非実在生物であるユニコーンの、骨格・内臓・筋肉・皮膚など身体を構成するあらゆる部位を制作する。制作した内臓を肋骨で覆い、骨格に筋肉を被せ、血管を張り巡らせて皮膚を縫合する。そうして架空の生物であるユニコーンを実在させる。

制作したユニコーン体内の心臓と肺に生命維持装置をつなぐ。肺に空気を送り、心臓と血管に液体を流し、呼吸と血液循環を行うことでユニコーンを蘇生する。

幼い頃実在すると信じていた架空の生物は、今は実在しないと分かっている。存在を否定されたその生物は、現実世界で居場所を失い人々の脳内で息絶え屍となって横たわっている。私は出来る限りの制作を行い、純真さの象徴であるユニコーンを自らの手で実在させ、心臓に血を流し肺に空気を送り息を吹き返させる。それは私達が気付かぬうちに失った夢や希望・幻想を蘇生させる瞬間である。



モノについて （About an object）

堀川 すなお（ホリカワ スナオ）

1986年大阪府生まれ。大阪府拠点。

目の前にある もの その本来の姿を探るため、制作をしています。ものの名前を聞いたとき、私たちは頭の中では容易にその形をイメージすることが出来ます。その共通のイメージによって私たちはコミュニケーションを図っています。しかし実際に目の前にある もの と、そのイメージは同じかどうか。

「今まで知っていると思い込んでいたものは一体なんだったのか？」を自分の制作を通じて問いかけています。



透明の対話（Transparent dialogue）

松本 和子（マツモト カズコ）

1988年大阪府生まれ。京都府拠点。

わたしは「剥離と忘却」をテーマに、フレスコ壁画の作品空間を展開します。絶えず変化し続ける社会的背景と、それらから様々な影響を受けて宙を彷徨う個人の意識との親和性や透過性を見つめると共に、人々の忘却の痕跡を現代的に昇華させるような光景を表現したいと考えています。これらのテーマの絵画空間を、砂と灰と水という自然素材から成るフロンフレスコやストラッポ（表層を剥ぎ取る）などの古典技法を用いて展開することは、生き物のはじまりと終わりのような忘却の連鎖を身体的に表現することに繋がり、かつて古代の洞窟壁画でもそうだったように、人々が生きた時代の気配を遺すことができると感じています。フレスコの漆喰層それ自身が幾層ものヴェールに包まれた生誕の場であり、また褥でもあるのです。わたしがフレスコ画を描くことは、他者との共通感覚であるヴェールのようなものを通じて、今日的な剥離と忘却の痕跡に関わろうとする試みだと思っています。



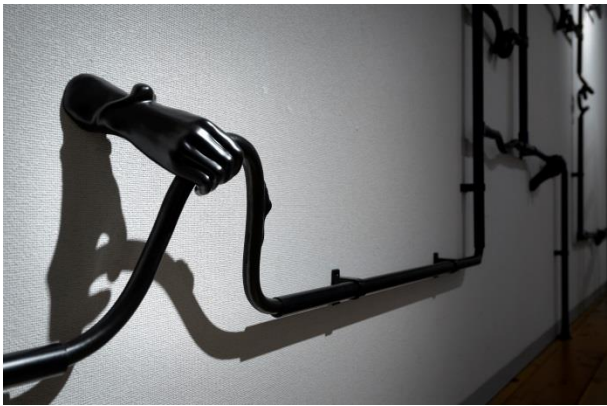
庭のほつれ

(I'm waiting for the time, when that field is opened again.)

三枝 愛（ミエダ アイ）

1991年埼玉県生まれ。埼玉県,京都府拠点。

2011年の東日本大震災以降、関東近郊の椎茸農家は深刻な原木不足に陥り、我が家でも手持ちの原木は3分の1にまで減少し、ビニールハウスはすかすかの状態が続いた。ほた木を支えてきた板は、ほた木の不在によって次々とたわみ、土に打ち付けた棒は根元から折れた。不要となった板はまとめて庭に放置されている。
2014年12月、私はその山の中からまだ形のあるものを拾い、蠟を塗り、ギャラリー内に展示した。
2015年6月、さらに長い2枚の板を大学へ運んだ。事故が起きたのは7月。保護するつもりで施した蠟の重みで、板はふたつに折れてしまった。折れずに残った片方の板には、何もすることが出来ないまま、卒業を迎えた。
2016年1月20日、わたしは庭へ、板を歩いて持ち帰った。ここから出るとき、帰ってきたとき、なにも状況は変わらなかった。でも考え続けなければいけない。なくした景色を本当の意味でなくすことのないように。
。今まで一度も見せてこなかった、このことの核となる存在、つまり椎茸の原木を、こんどは岐阜に持ち込んで眺めてみる。そこからもう一度はじめてみたい。



Conduit（導管）（Conduit）

三木 陽子（ミキ ヨウコ）

1963年兵庫県生まれ。京都府拠点。

私はこの度の身体の方行方というテーマに向かい、日常存在するにもかかわらず忘れがちな見えざる世界と見えている世界の境界を表現します。私の闇（見えざる世界）のイメージは決して暗く絶望的な虚無なものではなく、生命の息遣いや感触、個ではない意識、それらを含む根源的な全てであり宇宙そのものです。数十年の間、私は身体やプリミティブなものについて、そしてそれらから派生する個が個であるための意味や人類の進化に伴った虚の世界と実在する身体との関わりを思考してきました。私の作品制作での主たる方法の陶芸は手で考える触覚の表現であり芸術であると感じています。人間には五感があり、視覚と聴覚は客観的、嗅覚と味覚は主観的、触覚はその両方の感覚を持ち得ている感覚であり、何かを触った時、同時に自分の内部も感じるという、まさに外部と内部を結びつける、無意識と意識を結びつけることのできる純粋で根源的な感覚です。陶と触覚から放たれる生命のイメージとケミカルな素材から生まれる工業製品を組み合わせたオブジェを与えられたキューブに貼り巡らし空間を作り上げ、身体の無意識の中に存在する宇宙への境界をコンセプトに制作します。



DEMO DEPO イン・ザ・キューブ支店 (DEMO DEPOT IN THE CUBE Branch)

水無瀬 翔（ミナセ ショウ）

1984年京都府生まれ。京都府拠点。

消費社会の発展によってあらゆるものが商品として流通し、分業化の進行はさまざまな行為の代行を可能にしてきた。本作品では、デモ行進のような人間（市民）が主体的に行うような行為をロボットに代理させ、さらにそうしたデモ行進までも商品として流通することを批判的に表現するため、デモ用ロボット貸出店舗「DEMO DEPO」を考案する。貸出用ロボットは実際に京都市で警察署および公安委員会から正式に許可を受けてデモ行進を行っている。店内には参考映像として、京都で行なったロボットのデモ行進の映像が流れており、顧客（貸借人）はその映像を観てどのようにロボットでデモ行進するか参考にできるようになっている。貸出料金は無償で、そのかわり貸借人はデモ行進の映像記録の義務を負う。このように実際に貸出可能なショップとして展示を行うが、ロボットによるデモ行進を推進することが本展示の目的ではない。あくまで店舗という日常的に接する社会的な形態を展示形式として採用するのは、本来人間がその身体を使用してするのはその行為をロボットが代理を務めるという、現実には可能だが、絵空事のように、ある意味滑稽な実践にリアリティを与えるためである。



移動する主体（カタツムリ） Shifting Self (Snail)

耳のないマウス（Earless Mouth/ Mouse）

2015年結成。長野県、東京都拠点。

私たちの生活するこの社会は経済活動における有用性において物事の価値が判断されているように思えます。私たちの合理主義的な意識(言語)によって構築された目の前に広がる現実も、同じ言語を用いて別の使い方をすれば今よりも恐ろしいものにも、滑稽なものにもなり得るのではないのでしょうか。作品「移動する主体(カタツムリ)」はその言語(記号)と、それが指し示す対象との差延が生み出す様々な現実の、普段はあまり浮き上がってこない一面を切り出そうとする試みです。



Missing matter （Missing matter）

宮原 嵩広（ミヤハラ タカヒロ）

1982年埼玉県生まれ。埼玉県拠点。

私たちの身体はコンピューターの発達、普及により拡張を続けている。インターネットは経験や記憶にとって代わりアバターが広大なネットを徘徊してもなお私たちはここに立っている。現実と仮想現実を亡霊のごとく彷徨う人々。実身体感覚は麻痺し仮想身体感覚の特化を余儀なくされている。このような時代だからこそ彫刻を考え、様々な素材に触れ、実在感覚を澄ましてきた。木を彫り、石を彫りその神ともいえる存在に触れようとした。石や木に神性を感じる人は少なくないだろう。いずれネットも神性を帯びるかもしれない。しかしそれはまだ先の話である。今まさにそれが起きようとしている素材がアスファルトなどの化石燃料と考えている。なぜなら神性を帯びる条件として、媒介可能であること、そして信頼されたまま死ぬことで永遠性を獲得することが挙げられるからだ。60年前後に九州派やスミソンが使用したアスファルトとは、労働者視点の進歩と死んでいく自然（生活）の象徴であった。しかしその破壊力はうすれ自然はすべてその下へと内包された。そしてあと50年もすれば枯渇してしまう。現代においてアスファルトを再掲することで人と物の関係を再定義する空間を展示します。



cranky wordy things (cranky wordy things)

ミルク倉庫+ココナッツ (Miruku Souko + The Coconuts)

2015年結成。東京都拠点。

『神秘主義』とは、ギリシャ語の“myein”（眼と口を閉じる）が語源であるといえます。これは自身を外部から対象化し把握するのではなく、主体がその内部を通し客体（無我）へと押し開かれる変成過程を捉えた実践的思想なのです。

プラトンの『ティマイオス』では、世に満ちる「宇宙靈魂」の中に偏在する個人が組込まれているとされます。我々が何かを学ぶ時、外部から知識を獲得するのではなく、この「宇宙靈魂」が「想起」され一いつなればベロツと裏返る巨大な脳ミソの渠を内側からなぞるように一智慧は引き出されるのだというのです。これに倣えば、人は異界より来る悪霊や狐に憑かれるのではなく 内に眠るそれらを呼覚ますといえるでしょう。

どんな事物も潜在的な接続可能（媒介）性を持っています。むしろ鉄屑や肉塊が「物質である」という時、我々は閉じた媒介性の束（量塊）をみていえるといえるのです。ともすると身体は先天的存在なのではなく、偏在する事物が魂の具体的事例となり得た時の媒介性の顕われ [embody] こそののだといえるでしょう。言換えれば、物質という有限性を凌駕する何かしらに憑かれ、一時の「身体」がたち現れるのです。



Mimesis Insect Cube (Mimesis Insect Cube)

森 貞人（モリ サダヒト）

1950年愛知県生まれ。愛知県拠点。

身体の一部として作られた道具や、身体と触合うことで感情が生まれ記憶が残るモノ達。道具やモノは時代の変化、利便性の追求、科学の進歩により『ガラクタ』と呼ばれ廃棄され消えて行きます。東日本大震災では一瞬にして消える未来もある事を見せられました。しかし身体の魂や感情等大切なものが宿る、使い古された『ガラクタ』は重要な存在です。

思い出や記憶を亡くしてしまう無念な思いが起点となり、昆虫の擬態をヒントに、最初のムシ型オブジェを制作しました。現実の虫に似せるのではなく『見たことのないモノはきっと素晴らしい』というコンセプトで『空想のガラクタムシ』をイメージしました。道具の機能美や手に柔らかな曲線は『身体のゆくえ』の延長線上に存在します。この作業はアート作品を作るというより、幼い頃の昆虫採集に似た感覚です。現在、1000点を越える擬態オブジェを採集し、中にはクマゼミの死骸から頂戴した羽を付けた擬態羽ムシも存在します。

これらの擬態ムシを壁面、天井などに展示し、丈六のキューブ空間を巨大なムシカゴとして表現します。擬態ムシ達は自らが身体の延長線上に在るモノとして丈六空間に集いました。



THE MAUSOLEUM - 大霊廟 - (THE MAUSOLEUM)

安野 太郎（ヤスノ タロウ）

1979年埼玉県生まれ。埼玉県拠点。

「THE MAUSOLEUM」は数珠つなぎにケーブルで繋がれた合計12台の自動演奏装置が奏でる音楽作品です。彼らはエネルギーが供給され続ける限り永遠に情報を交換しながら音楽を生成し演奏します。現在より遙かな未来、もはや人類が減じた後の世界に、永久に人類を葬送する大霊廟として残された施設でなり響く音楽という想定です。

音楽は常に今ココという時間の流れるもので、霊廟は過去を祀る建造物です。展示という形式で自動演奏される音楽は、時空を超え、未来の量という矛盾した存在として立ち上がります。

この作品を構成する作家自身によって作られた自動演奏リコーダーの奏でる音楽は「ゾンビ音楽」と呼ばれています。ゾンビ音楽は「音楽する非・身体」が奏でる音楽です。ゾンビの非・身体とは人間の身体模倣でも拡張でもありません。意志を剥奪され体だけが動いている非・身体。それは人類に対して鏡を掲げそこに映る姿を表しています。